

「あらっ？」

赤丸精肉八王子工場で、輸入牛肉の解凍庫に入った北原鹿代は、棚の下に転がっている『それ』に気づいて、思わず足を止めた。何か、黒い毛糸玉みたいなものが落ちていた。嫌な予感がした。ひよつとしてこれ、ネズミじゃないの？ おそろおそろ足先でつついてみるけれど、動かないし、柔らかくもない。…凍っているのだ。肉は冷凍のまま輸入されて、その日使う分だけ解凍庫で解凍される。凍っているということは、肉と一緒に冷凍庫へ入っていたに違いなかった。

数年前も、輸入の冷凍牛肉のダンボールに冷凍ネズミが入っていて大騒ぎになったことがあった。輸入先の会社にクレームをつけると『うちの管理は完璧だった。もし混入するとしたら、移送の時だ。そこまでうちが責任を負う義務はない』と自社でのネズミの混入を絶対に認めようとしなかった。肉はコンテナで移送される。どこにネズミの入る隙があるんだと理不尽に思いつつ、向こうの言い分を渋々受け入れ、最初にネズミを見つけた鹿代が一人、悪者みたいに上司から叱られた。もともとあの上司とは馬が合わなかった。ネズミをダシにこれ幸いといびられたのはわかっているけれど。

そういえば新しい取引先になったのか、先週から肉の入っているダンボールの印字が変わった。ひよつとして、そこでの保管に問題があったんじゃないかしら。ああ、でも肉にネズミが交じっていたとなったら、全品再検査の上、今日の材料は全て廃棄。そしてまた私が責められるのかしら……。

チャリと周囲を見渡すけれど、解凍庫には自分のほかに誰もいない。鹿代は床の冷凍ネズミを素早くビニ

ールエプロンのポケットに滑り込ませると、そしらぬ顔で外に出た。

「あら、鹿代」

解凍庫の外で、四十五と同年の芳江とぼったり鉢合わせた。今の、見られちゃったかしら。胸がドキリとする。

「精肉室にいないから、どこへ行ったのかと思ってたわ」

「足りなくなってきたから、解凍したやつを取りにきたんだけど、その前にちよつとおトイレに行きたくなっちゃって」

俯き加減に鹿代は出入り口へと足早に歩いた。履物を替え、キャップ、マスク、エプロンを外す。手袋はしたままポケットの中を探り、それを素早く握りこんでトイレへと走った。胸をドキドキさせながら個室の中でそつと手を開く。体の大きさは十二、三センチで、尻尾が五センチぐらいある。ネズミは灰色っぽい感じが多いけど、これはどつちかかっていうと茶色っぽい。でもちよつと待って。このネズミの足、変じゃない？ 手も鉤爪だし、よく見れば羽みたいなのまでついている。

蝙蝠！ 頭の中に閃いた。これって蝙蝠なんじゃないかしら。蝙蝠なら残飯なんて食べないだろうし、どつちかかっていうと鳥みたいなのだから、ネズミよりもずつと綺麗よ。鹿代はホッと胸を撫で下ろした。

ここで精肉している肉のほとんどは、ミンチになって加熱したハンバーグの状態で出荷される。パックの状態でお湯につけて、もしくは電子レンジでチンして出来あがりという、あの種類だ。ハムだと問題だけど、

加熱して出荷する肉だから大丈夫、と鹿代は自分で勝手に決めつけた。

それにしても、どうして蝙蝠なんかが牛肉の中に交じていたのかしら。ああ……そういえば、蝙蝠は血を吸うんだっつけ。

きつとこの蝙蝠は牛肉に交じってアメリカからはるるるる海を渡ってきたのね。それにしても肉に交じって自分も冷凍になるなんて、随分間抜けなんじゃないかしら。

これ、どうしよう……と迷ったものの、結局鹿代はトイレの手洗いの横にあるゴミ箱に冷凍蝙蝠をポイと捨てた。どうせ死んでいるなら、どこへ捨てても同じだと思っただからだ。嗜れ嗜れとした気持ちで精肉室へ戻ると、芳江が『遅かったわね、大丈夫？ 気分でも悪いんじゃないの』と声をかけてきてくれた。鹿代は『大丈夫、ちよっとお腹の具合が悪くって』と肩を竦める。

新しい解凍肉の置かれたテーブルで、鹿代は張り切って包丁を握った。すじ肉や軟骨を慣れた調子で選り分けていく。

「ねえ芳江、蝙蝠っていったら鳥みたいなもんよねえ」

隣で包丁を握っていた芳江は首を傾げた。

「蝙蝠は蝙蝠なんじゃないの。急にどうしたのよ？」

鹿代は笑った。

「昨日、うちの子に聞かれたのよ」

それっきり、鹿代はトイレに捨てた蝙蝠のことは忘れてしまった。

ガッシュヤーン……横倒しになったゴミ箱の隣、アルベルト・アーヴィングは真っ裸のままタイルの上で四つんばいになっていた。目の前には、丸められたペーパータオルが散乱している。

アルは栗毛色の短い髪を左右に振った。ようやく凍ったのが溶けたと思っただら、ゴミ箱の中だったなんてついてない。しかも溶けると同時に人型になったから、ゴミ箱から思いきり飛び出してしまった。

辺りは暗い。夜なんだろう。ブルッと震えがくる。十月に入り、夜はぐつと気温が下がるようになった。裸だから寒いのは当たり前だが、それでも昨日、一昨日までの寒さより幾分ましな感じがするのは気のせいだろうか。

アルは辺りにそこはかとなく漂うアンモニア臭に眉を蹙めた。この独特の臭いは、おそらくトイレだ。開いたドアの奥に便器が見えた。随分と便座が低い。冷凍になったはずの自分が、なぜトイレのゴミ箱に捨てられていたのかはわからない。わからないけど、ここはどこだ？ 牛肉の匂いはしているけど、香辛料や消毒薬の匂いも強い。ジャンの精肉工場はもっと肉と血の匂いが生々しくて、それと一緒に土と草の匂いもしていた。

そもそもどれだけの時間、凍ったままだったんだろう。考えているうちに、凍ったまま冷凍庫に長期保存

されて、季節が二周、三周していようとも、自分には大した意味はないんだと気づいた。それよりも切実な問題は、服がないこと、腹が減ったことだ。何か着ないことには、外へ出ていけない。じゃあ夜が明けて蝙蝠になるまで待つか、ここで？ それも嫌だ。アンモニア臭が肌に染みつきそうな気がする。

それにしても散々な目にあつた。アルはノソリと立ち上がると、軽く両手足を動かした。住処すまがにしているジャンの精肉工場は、アルが生活していくのに都合のいい場所だ。酪農、精肉業と共に企業化、機械化が進む中で、ジャンの工場は昔ながらのやり方で細々とした経営を続けている。従業員も兄弟に叔父さんに従兄弟と面白いぐらい縁故だし、衛生状態も：アルの目から見ても、ちよつとやばいんじゃないかと思うほど大雑把だつた。だからこそエサにありつけているわけだが……。

ジャンの精肉工場に連れてこられた牛たちは、スタンニングボルトで失神させられたあと、喉や血管を切られて失血死する。一匹の牛が死ぬほど血を流すのだから、相当凄まじい。加えて、牛は皮を剥いだり、吊り上げたり、刺激で反射運動を起こす。反射とはいえ、蹴られたら大怪我をするので、額から脊髄にワイヤーを通して動きを止める。この一連の作業が終わるまで、人は牛にかかりきりになる。蝙蝠が一匹ぐらい工場に忍び込んで、牛から滴る血を必死に舐めていたとしても、気にしている暇はない。牛が完全に死に、動かなくなつてから血に群がるアルは追い払われるのだつた。

その日、アルは寝坊をしてしまい工場へ行くのが遅くなつた。牛は既にと畜とくが終わつて冷蔵庫にしまわれ、床の血も綺麗に洗い流されていた。アルはチツと舌打ちした。じゃあまた明日……と言うには、腹が空きすぎている。

昨日は雨だつたし、濡れるのが嫌で一日中、住処すまがにしている朽ちかけたポート小屋で惰眠を食つていた。一日ぐらい食わなくても何とかなるだろうと思つていたけれど、流石まさかに二日もエサなしはきつい。どうしよう、腹減つたなあ……と、途方に暮れつつ天井の梁はりにくつついてみると、ハーヴェイが部屋に入ってきた。冷蔵庫の扉を開け、中に入る。牛は皮はぎをして内臓を取り出すと、二日ほど冷蔵庫で凍らない程度の低温で寝かされたあと切り分けられる。アルはこつそり後について、巨大冷蔵庫……というより、冷蔵部屋の中に入った。凍るほど寒くはないが、体がゾクゾクする。天井からは、足にチェーンをかけた沢山の（元）牛たちが、几帳面なクロゼットのように、整然と吊るされている。

どうやら前々日に冷やしておいた肉の解体をはじめようだ。ハーヴェイはジャンの弟で、大雑把な工場の中にいて最もルーズな男だ。フンフンと鼻歌を口ずさみながら、ステンレステーブルに載せた肉をさばいていく。奴が鼻歌を歌っている時は、大抵いい具合にアルコールが回っていることが多い。そう、ハーヴェイにはアル中の気があるので、たまに包丁を持つ手がブルブル震えている。

奴なら大丈夫だろうと確信し、アルは天井に吊り下げられている牛の半身にびつたりとくつついた。やっぱりハーヴェイは冷蔵庫を飛び回っている蝙蝠に気がついてない。それ幸いと、アルは肉にこびりついている固まりかけた古い血を夢中で舐め取つた。二日前の血なので鮮度も味も今一つだが、文句は言つてられない。